

オンライン授業の経験を活用した対面授業改善の取り組み

南川 慶二
(徳島大学教養教育院)

1. はじめに

コロナ禍を経験したことにより、オンライン授業の導入など、授業実施方法は大きく変化した。筆者は講義動画の視聴と LMS(manaba)を活用したオンデマンド授業を中心にさまざまな試みを行ってきた^{1,2}。それらの経験を対面授業に取り入れ改善を試みた事例を報告する。

2. オンライン小テストの活用

教養科目(生活と社会)「消費者が主役の社会へ」は、筆者がコーディネータとなり消費者庁職員がオムニバス形式で実施している。2018年度から前期16回の対面授業として開設し、2019年度も同様に実施した。2020年度前期からコロナ禍が始まり、実施方法を検討した結果、オンライン授業の未経験者でも容易に担当できるように講義資料と音声ファイルを用いたオンデマンド方式に変更した¹。2021年度には非常勤講師もオンライン対応が可能となり、Teamsによるライブ方式に変更した。コロナ対応3年目となった2022年度から前期に加え後期にも開講し、前期はBCPレベルに応じて対面授業またはオンラインを切り替えて実施した。2022年後期には原則対面とし、マスク着用を条件として対話型のアクティブラーニングも一部に取り入れた。

消費者庁職員等の講義は、当初2年間の対面授業ではスライドで詳細な資料を映写しながら丁寧に講義を進めるスタイルで、最後の15分程度を小テストと感想や意見・質問等を文章にまとめるリアクションペーパーの作成に充てた。受講生の態度は真面目であったが、一方的な講義形式が中心で学生同士あるいは講師への質問などの対話はほとんどなかった。オンデマンド形式とした

2020年度にアクティブラーニングの代替としてmanabaのミニレポートを相互閲覧してコメントを書く方法を導入した。この方法については当カンファレンスでも報告したようにアクティブラーニングの代替として一定の効果があった¹。

2022年度後期から原則対面授業に戻ったことから、講義実施方法と小テストおよびリアクションペーパーの提出方法を変更した。講義は30分を区切りとする3部構成として、それぞれの区切りでmanabaの小テスト1問に解答する時間を設けた。リアクションペーパーは当日ではなく講義の3日後を期限としてmanabaに提出に変更した。これらの変更により、講義への集中力が維持されるとともに、小テストによる理解の確認や講義後に振り返りとまとめを考える時間の確保が可能となった。学生の授業評価アンケートにおいて、これらのことが良かった点として評価された。

3. コミュニケーションの改善

教養科目(人間と生命)「生命現象・生体材料とバイオメテックス」において、通常の講義形式に加えて、質問や感想へのフィードバック、グループワークとプレゼンテーションや提出物の相互評価など、教員と学生および学生同士のコミュニケーションを増やす工夫を取り入れた。

当該授業は2021年度後期に新設し、当初からコロナ対応が必要であった。当時は講義室の人数制限や感染対策などの条件を満たせば対面授業も可能であったが、オンライン授業が多かった時期であり、最初の数回をオンデマンド形式で実施した後にアンケートで実施方法について受講者の意見を確認した。その結果、オンデマンド形式の継続を希望する意見が多数であったことから、

最後まで全ての回をオンデマンドで実施した。講義動画作成のためのビデオ収録室を利用できたため、毎回の講義を動画として作成してアップロードし、manaba でリンクを通知することにした。動画を視聴して manaba の小テストに解答することで平常点とした。当カンファレンスでも報告した教養科目「身近な高分子物質の科学と技術」と同様に、小テストは講義の内容に関する質問や感想などを自由に書くことを中心とした²。

質問や感想・意見などを文章としてまとめることを義務付け、成績評価に用いることを周知したことで、毎回多数の質問や感想が寄せられた。全てを Excel ファイルで一覧表にして manaba で共有し、一つ一つに回答やコメントを記入するとともに、それらの一部を口頭で授業の最初に説明した。質問を考えることで講義を集中して聴く習慣が身につく、次回のフィードバックにより理解を深めることができたと考えられる。

開設2年目の2022年度後期には、対面授業が中心になっていたことから原則対面授業とした。発熱等による欠席者に配慮する必要があったため、前年度に作成したオンデマンド講義動画を活用した。これは欠席者用としてだけでなく、出席した学生にとっても復習に役立つことができた。動画を作成したことで、何度でも好きな時に復習できるオンデマンド形式の利点を取り入れることができた。

4. グループワークとプレゼンテーション

上記の「生命現象・生体材料とバイオミメティクス」では、開設時の2021年度にはアクティブラーニングの代替としてプレゼンテーションファイルの相互閲覧を実施していた。2022年度から対面授業になったことから、発表会形式に変更した。2022年度後期は各自で調べた内容を1人ずつ口頭発表する形をとった。受講者の感想によると概ね好評であった。2023年度は前期に変更したためか受講者が大幅に増えたこともあり、グループでの発表会形式とした。事前の小テストで各自が興味を持ったテーマを提出させ、興味が近い

学生を組み合わせるグループを編成した。また、可能な限り異なる学部学科の組み合わせとした。グループの作り方についてはアンケートで学生の意向も尋ねて参考にした。その結果、興味が共通するが異なる視点（学部学科の違い）を持つグループを編成することができた。授業時間の一部をグループでの話し合いに充て、発表の準備期間とした。発表会はグループごとに実施し、質問を口頭と manaba で受け付けた。これらのグループ編成方法から発表までの一連の実施は受講者から好評であった。



写真: グループによるプレゼンテーションの準備

5. まとめ

知識伝達型に偏っていた対面授業の改善策として、講義を30分ずつ区切ってオンライン小テストを実施した。学生とのコミュニケーション不足については、質問や感想への教員からのコメントの共有、学生同士のレポートの相互評価、グループプレゼンテーション等の機会を増やした。また、オンデマンド講義動画と課題を復習及び欠席者用にできるだけ多く使用した。これらの工夫によって学生の集中力や意欲の向上が見られた。

参考文献

1. 南川慶二, ミニレポート相互閲覧を用いたオンデマンド型アクティブラーニングの試行, 第16回大学教育カンファレンスin徳島, B4, 2021.
2. 南川慶二, 動画視聴形式のオンデマンド型授業におけるコミュニケーション, 第17回大学教育カンファレンスin徳島, A4, 2022.